

急に現れた篤彦の姿に三人の女は驚き、一瞬、当惑したが、若い女はまた勝ち誇ったように語気を強めた。

「まあ、この店、こんな子どもまでおるの」

好恵はまとわりついて離れようとしないう篤彦の頬を平手で殴った。篤彦は廊下で倒れ、つかまっていた手が離れた和代は、その場に尻もちをついた。そこへ香川はんが出てきた。

「どーも、騒々しいてならんのお。何を叫びよるんじや。ワシや、酒も飲めんがい」
女は香川はんと篤彦を交互に見ながら、「田舎げな店！」と玄関を乱暴に閉めて出て行った。

「香川はん、すんまへんなあ。せっかくうちらに一席もうけてくれる日や言うのに」
奥から出てきた女将が詫びを入れた。

「気にすなや。いろんな人間が居るわいの。それより早うご馳走にせんかい」
そのとき、涙顔で出てきた夕希ちゃんが女将さんに謝った。湿っぽい空気を振り払うようにぎおん中にまた、香川はんの声が響いた。

「さあ、皆機嫌なおせよ。和代も不機嫌はやめよ。あつ坊もお母はんに飛びかかっりよる暇あったら、葉子ちゃん呼んで来んかい」

長かった一日が暮れ、晩さん会が始まった。
座敷のテーブルに、好恵の自慢の料理が並んでいる。ゆでた鯛の身をほぐし、そのまわりにそうめんを盛りつけた鯛そうめんを真ん中にして、野菜と刺身が添えられている。その料理を見た瞬間、皆の張りつめていた空気が一挙に和んだ。

「うわ、美味しそう」「おまけに綺麗わあ」

篤彦も葉子も、めずらしい鯛そうめんをタレに漬けてすすり、何度もお代わりした。

箸を置いた葉子に、篤彦は声をかけた。

「ぎおんの家で一番涼しい所、知っとる？」

「井戸の上やろ」と答えた葉子は「蛸もおって……」と付けたしてクスクス笑った。

氷の冷蔵庫代わりの井戸の上に、時々、ゆで蛸が吊るされているのを篤彦も見ることがある。「こんなヤツ！」篤彦はいきなり口を尖らせ、額に皺をよせて見せた。

葉子はまた声を立てて笑った。夕希ちゃんも遅れて微笑んだが、目は笑っていないかった。

「そーじゃ、今日は皆にチップがあるんぞ」

香川はんが、やおら腹巻きに手を突っ込みながら言った。

「牛がええ値で売れたご祝儀やけん、これ、不公平なしに皆に分けてやってくれや」わしづかみにした千円札を女将に渡した。

「ホレ、あつ坊と葉子ちゃんにも」

二人はしわくちやの百円札を五枚づつもらった。正月でも盆でもない時の大金の小遣いに、篤彦は嬉しさよりも、それを持っている自分の手に驚いていた。

「ワシ、今夜はいつちよ、歌おうかいのお」

香川はんはせいせいして、そばにいる誰も楽しくさせた。ぎおんには、夜遅くまで「満州馬賊の歌」が聞こえた。

お盆が来てタケシも守も、それぞれの親戚に行ってしまい、篤彦はまだ及川へ行けない。二人が帰ってくるまで、お堂の縁側で雑誌でも読んで待とう。風邪の微熱が続いているし、ちょうどいい。そう自分に言い聞かせていた。

お荒神さんには、六時をすぎると誰も来ない。

ひっそりとしたひろばに、ツクツクボウシの鳴き声が広がっている。庚申塔のある入口を曲がると、縁側にポツンと葉子が座っているのが目についた。

「何しよん？」篤彦は、少し離れたところから恐るおそる声をかけた。

「蝉の声を聞いているんや」

形よく尖った顎をあげたまま、そう言った。

「あ、ツクツクボウシか」

「え、今、何ボウシ、言うたん？」

「ツクツク……ボウシ、蝉の名前や」

「えー、蝉が帽子を着てるんか？」

葉子は調子はずれの声で、間の抜けたことをくり返した。

「ソレ、どんな帽子なんや？」

「帽子とは違うんやって。夏の終わり頃になったら鳴きだす蝉の名前なんや。蝉は命が短かい上に、今頃から鳴き出すツクツクボウシはもうじき自分が死ぬの知って、命がオシイ、ツクツク、オシイ、言うて鳴くんや。お爺ちゃんが言うった」「けど、ツクツクボウシが蝉やなんて、帽子みたいな形した鳥か動物や思うてしもうたわ」

「葉子ちゃんが、そなに言うんやったら、もうぼく、鳥でも帽子でも何でもええわ」

篤彦は、女の子と二人きりでこんなふうにはなすのは初めてだった。それだけでワクワクした。蝉の音がめずらしい町、葉子は大阪のどんなところに住んでいるのだろうか。

「蝉、すぐ死ぬのに何で生まれてくるんやろな？」

「なんでやろうな？」

篤彦は答えられなかった。二人は黙ったまま、蝉の鳴き声を聞いた。それがふつと止まったとき、葉子は「また明日な」と言い残し、生け垣の間からぎおんの中に消えた。

篤彦は葉子と言った「また明日な」という言葉に、タケシや守と言いついて別れ際の挨拶とは違う響きを感じて胸がざわめいた。

翌日の夕方、野菜を持って行くふりをしてぎおんをのぞいてみた。

「葉子はお荒神さんに行っとるで」

和代にそう言われ、篤彦はいったん家に戻ると、『ノンちゃん雲に乗る』を持ってひろばに行った。絵本でも雑誌でもない一番本らしいやつで、葉子に読ませてやりたかったのだ。きっと氣にいるだろうと心がせいた。

「これ、読んでみたらええわ。ノンちゃんいう子が、モミジの木からひょうたん池に落ちるんやけど、そこはふわふわの雲の中なんや」

「面白そな話やけど、ウチ、漢字読めへんのや」

「この本、仮名ついとるし、ゆっくり読んだらええやん」

「ウチ、一年の国語の時間に、水と木を間違えて笑われて、辛いことがあった」

葉子は本の話には氣を向けなまま、独り言のように言った。もしかして、この

題名も読めないのだろうかと思うと哀しくなった。するといきなり、篤彦の中に「漢字やこ読めんでもええじゃないか」という思いが突き上げてきて、目の前の『ノンちゃん』を捨ててしまいたいような気持ちに襲われた。

「葉子の葉いうて木の葉っぱの葉やろ」

「そうや、生まれたとき、窓の外に緑がいっぱいあったんやて」

「葉子ちゃんは木なんや。木の分身なんや。ほいじゃきん、水とひつつくんや」

「え、何のこと？ わかるように言うて」

「あんな、木の中には、樹液いう水がずーと流れてるんや。理科で習うたとこなん

や」

「それがどうしたん？」

「葉子ちゃんの中は、いつも水で一杯なんや。ほいじゃけに、木と水の区別がつかんでも構わんのや。それでええんや」

篤彦は話しながら気持ちが高ぶり、本当にそうなんだという確信を強めていった。

「木の中を水が流れているんか？ どの木でも。ウチ、その音きいてみたいわ」

そう言うのと、葉子は椋の木のあるお堂の裏に足早に歩き出した。

思いがけない言葉にひかれてついて行くと、葉子は、両手で木の幹を抱きかかえるようにして耳を押し当てている。

「きこえるか？」声をかける篤彦を制するように唇に指をあて、片方の手で手招きをした。

篤彦も反対側から同じ恰好で幹を抱え、ざらざらした木の幹に耳を押し当ててみた。

風通しの悪い樹下には、屋間の熱気がたちこめていてじっとしていても汗ばんでくる。

「あつ、聞こえてきた。低い音やけどザアザアいうてる……」

葉子の声に、篤彦も真剣になった。やがて篤彦の耳にも、小さな鼓動のようなものが間断なく響いてきた。

暮れかけた上空で風がそよいでいる。何百年も生きてきた椋の大木は、その梢に土中深くから吸い上げた水分を送り続けていたのだ。篤彦は、葉子の身体が巨大な椋の木と水の音に紛れこんでしまいそうに思えた。

「本当やったな……」

「ウン、はじめてやわ……」

幹の両側からのばしていた二人の手が触れあったとき、葉子は篤彦の手に自分の手を重ねた。二人は黙って手を握りあっていた。

木の葉を通した月の光は薄く、海の底にいるようだった。

そのとき、葉子は思い出したように言った。「身体に流れとる血も、音をたてているんやろうか」

樹を抱えていた両腕で篤彦の体を引き寄せると、「聞いてみて」と胸に頭を抱きかかえた。

葉子のふくらみかけた胸の奥から、早い鼓動の音が伝わってきた。

「聞こえるか？」「うん、よう聞こえる」

興奮しながら答える篤彦の頭を抱いたまま、葉子はまっすぐ立っていた。

「葉子ちゃん、息がでけん」

しばらくして、篤彦は言った。

「ごめん、ごめん」

葉子は手をほどいてくれた。

せまってきた夕闇の静かさの中で、木の葉ずれだけが鳴り続けていた。

その夜、篤彦は遅くまで、漢字辞典を開いてメモを作っていた。水と木を間違えた葉子のために、形の似ている漢字を選び出して書きためていたのだ。

右と石、手と毛、学と字、末と未、池と地、王と五、花と死……、紙いっぱいに書くつもりなのだが、まだ余白ばかりが目についた。

篤彦は、今日、理科で習った樹液のことを、自分で確かめもせず得意そうに話したことがとても恥ずかしかった。だが、葉子と一緒にその音を聴き、本当にあったことを確かめ合えたことが何倍も嬉しかった。

たとえ「ノンちゃんの雲」を雪や雨に間違えたとしても、葉子は本当に賢い子なんだ。篤彦は、わいてくる憧れと胸苦しさを抑えられなかった。

(以上10月12日放送分)